て遠く其姿を沒して了つた、馬は其を見ると共に然も安心したる樣に一聲低く嘶いたので、上等兵は初めて吾身の危急の場合を其愛馬が前知して助けてくれた事を悟り、思はず馬を抱いて感激の涙を流したとの事である

敎を守つて斃れた犬

佛國ビッドフォルドの或る人は、日頃何んでも棄てあるものは取て來いと其愛犬に敎へて置いた。處で或る日其人は、家の庭の池の中の鯉を殺す爲め、爆裂彈を拋げ込んだ、すると其犬は突然飛び込んで其彈を啣へ彈は破裂して終に死んで仕舞つたそうです。

お話し三つ

馬鹿の夫婦

むかし〳〵、或所に夫婦者が居て、三枚の餅を二枚づゝ分けて食つて、殘つた一枚を二人して半分づゝ食はうと言ふと、婦の方のいふには、「夫よりはこれから二人で無言の行の仕較をしよう、そして先きに語ふた方を敗とし、勝つた者が、此餅を食ふことにしやうじやないか」そこで、夫も「夫がよからう」といふので、夫から二人して夜中まで、無言の儘で睨み合をして居た。所が、丁度、其處へ盜賊が這入つた、そして、夫婦の者が、自分を見ながら然言でゐるのを見て、全く恐ろしいから默つてるのだなと思つて、そこら中の物を引き出して持つて行かうとした。そこで、婦はとう〳〵堪らなくなつて夫に對ひ、「お前さん、男のくせに、何で盜賊を見逃すのです」と言ふと、夫は

「古めた、己が勝つた」と言つて、一枚の餅を取つて食つて仕舞つた。世間の人は、此話を聞いて隨分馬鹿の骨頂だと言つて笑つた。

頭と尾との爭

むかし〳〵或所に、一匹の蛇があつて、其頭と尾とが爭ひをしでかした。先づ頭が尾に向つて議論するには、「己は貴樣よりは、づうっとえらいのだぞ、己には第一耳といふものがある、目といふものがある、口といふものがある、夫で、物を聞きもすれば見もし、食ひもする、其上行く時は、いつも己が前に立つ、どうだ、尾なんぞよりは、餘程えらからう。」すると、尾も默つて居ない、「なーに、己の方がえらいのだ、其證據には、己がお前さんを行かせるから行けるのだ、そんなに言ふなら、さあ、一番獨りで行けるなら行つて見るがよい、といつて、いきなり、側の木に尾をくる〳〵と三回り半も卷きつけた。三日目になつてから、どうも、腹が空いてならないから、頭が食を求めに行かうとしても、行くことが出來ないので、飢餓に迫つて、とう〳〵頭も降參して、「なる程、貴樣をえらいとするから、はなせ」といつたので、尾は「そーら、どうだ」と曰つて離した。そこで、頭は尾に向つて、「今度は貴樣がえらいのだから、前へ行け」といつた。尾は得意になつて、前へ行つた、そして二歩三歩行つたと思ふと次の坑に墜ち込んで死んで仕舞つた。

狐と獅子

或時、狐が獅子と仲よしになつて、いつも獅子の後について乞食をして、獅子の殘りものを貰つては喜んで居た。一日のこと、獅子は腹が空つても

食を見付けない、そこで、いつもの通り後について來た狐を捕つて食はうとした。狐は驚いて、何故私をお食ひになるのですといつて歎くと、獅子は、「なに、平生、己の食べ物を分けてやつて、お前を肥やして置いたのは、全く今日の樣な時の爲にするのだ」といつて、とう〳〵殺して仕舞ひました。

怠惰者の祈禱

三河西加茂郡筋生村　近藤登喜子

或る處に、仕事と云つたら爪の垢程もせぬと云ふ怠惰者がありました、家は、だん〳〵貧乏になりそれに反し、子は、思はぬ程殖え遂には日に三度の粥水が呑めかねる樣になりました、或日の事、妻は夫に向ひ、アヽ妻程因緣の惡いものは、世につれあらまじと、嘆き訴へました、すると、夫、私も最前から、妻子が不憫である、どうにかせむと、日夜心を痛まして居る、ヨシ今から氏神樣に祈誓を掛け幸福を與へて貰はん、とすぐ其の日から七日の斷食祈誓を掛け一心不亂に幸福を祈りました、すると六日目の夜丑の刻頃、氏神樣が、白髮の翁に化けて出てきまして聲を怒らし、これ怠惰者め、其の方の斷食して幸福を祈るは全く感心は出來ない、斷食は其の方の常なり、祈るなら滿腹になつて祈れ、と言ひ放して消へ亡くなりました、怠惰者は七日の祈誓も水の泡となりて家に戻りました、其れと云つて家内食はずに居る譯にはをれぬ、氏神樣へ祈るには空腹では聞き届けがない、さて困つたと手を拱ぬいて考へて居りました不圖思ひ付き、自家に祭りある大黑樣に祈誓を掛